

## 実践事例2

### 第2学年「C読むこと」における実践

#### 1 単元

『走れメロス』

#### 2 本校の研究と本実践の関わり

文学作品を読解するうえで、作品素材と比較し、作者がリライトした部分の効果について考えることは、個々の叙述を根拠とした解釈を重ね、登場人物の人物像や変容、作品の主題について深く捉えることにつながる。

文学作品の読解において、個々の叙述を根拠とした解釈を結び付け、登場人物の人物像や変容の在り方、作品の主題に迫ることは大切である。また、作品全体への捉えが、個々の部分の解釈にはたらく場合もある。こうした部分と全体の読みを行き来させながら、作品の理解を深めていく力を、生徒に身に付けさせたいと考えている。

本単元では、太宰治『走れメロス』の読解に際し、作品素材との比較読みを行う。そうすることで、素材とは異なる作者の「書き加え」や「書き換え」が見えてくる。こうしたリライトは、素材を新たな作品へと作りかえるために作者がほどこした工夫であり、登場人物の人物像や変容、作品の主題に関わるものである。リライトの効果に着目し、読解を進めることは、上記のような能力の育成につながるものと考えている。

#### 3 実践

##### (1) 単元について

##### ①設定の趣旨

『走れメロス』は、ギリシャの伝説『デーモンとフィンテヤス』と、ドイツの詩人シラーの『人質』をもとに、太宰治によって作られた。なかでも、小栗孝則訳編『シラー詩抄』所収の『人質 譚詩』は表現面で『走れメロス』との共通点が多く見られ、作者が直接素材としたものと考えられている。本単元では、この小栗版『人質』を、『走れメロス』と合わせて提示する。

そのうえで、『人質』をリライトすることで、『走れメロス』はどのような物語になったといえるだろう」という中心課題を設定する。

『人質』のメロスは一貫した正義の士である。一方、『走れメロス』のメロスは、単純で独善的なところがある。途中で悪心をもち、セリヌンティウスとの約束を諦めようとさえする。そんな人間的な弱さをもつメロスが、友との信頼に応えるために、王城までたどり着き、ついに約束を果たすという展開になっている。こうした面から、『走れメロス』は『人質』を「人間の弱さを肯定し、それを克服していくことの尊さ」を主題とした作品に昇華させたものだということができる。

作者の「書き加え」としては、冒頭のシラクスの場面や最後の少女が登場する場面、メロスと王のやり取り、メロスの数々の心理描写などがある。有無がはっきりしているため、生徒にとっては見つけやすい。

一方、「書き換え」とは、『人質』の内容を作者が意図的に変えた部分を指し、今回は特に人物設定と場面設定の変換に注目する。具体的には、フィロストラトスの立場がメロスの忠僕からセリヌンティウスの弟子に変わっていること、結末の場面で王の居場所が王城から刑場に変わっていることなどを取り上げる。

この「書き加え」と「書き換え」は、作品の読解においてどちらも重要であるが、今回は特に「書き換え」に注目させたい。「書き換え」の部分は、『人質』の内容と比較することができる。そのため、「AからBに変わったことにはどのような意味があるか」「なぜ、『人質』の内容のままではいけなかったのか」という視点から、個々の叙述の効果を吟味させることができる。

また、本単元では、中心課題を解決するための小課題を生徒自身で設定する。そして、学習の過程で、解釈した内容を『人質』の場合と比較する活動をとる。その際、生徒が多角的な視点から考えを深めていけるよう、級友との交流の場を設ける。

##### ②単元の目標

○ 叙述の比較によって登場人物や場面の設定の違いを明らかにし、そこから導かれる解釈と根拠の関係を理解することができる。(知識及び技能)

◎ 『走れメロス』と『人質』とを比較し、文章の構成や表現の効果について考えることができる。

(思考力、判断力、表現力)

○ 『走れメロス』と『人質』の違いに興味をもち、考えたことを積極的に交流しようとする。

(学びに向かう力・人間性等)

### (2) 単元全体の流れ (全9時間)

- 第1時 『走れメロス』を読み、学習への意識をもつ。
- 第2時 『人質』を読み、『走れメロス』との違いを見つける。
- 第3時 二作品の違いを整理し、リライトの効果や作者の意図を読み取るための学習課題を立てる。
- 第4時 小課題①「メロスと王様を比べるとどんなことがわかるだろう」に取り組む。
- 第5時 小課題②「フィロストラトスに関する書き換えにはどんな効果があるのだろうか」に取り組む。
- 第6時 小課題③『『何だか、もっと恐ろしく大きいもののため』と語ったメロスの心情はどのようなものだったのだろうか』に取り組む。
- 第7時 小課題④「刑場の場面のリライトにはどんな効果があるのだろうか」に取り組む。
- 第8時 中心課題に関する自分の考えをまとめる。
- 第9時 中心課題について話し合い、作品の主題やリライトの効果への考えを深める。

### (3) 授業の実際

**第5時** 学習課題を「フィロストラトスに関する書き換えにはどんな効果があるのだろうか」とし、話し合いを行った。

まず初めに、フィロストラトスの立場が、メロスの忠僕からセリヌンティウスの弟子に変わっていることを確認した。その後、フィロストラトスとメロスの会話の内容を確認した。この会話は、表現の違いはあるものの、フィロストラトスが、メロスに走るのをやめるように言った点と、メロスを信じ続けたセリヌンティウスの刑場での様子をメロスに伝えている点で共通している。

そのうえで、立場の違いによって、メロスに走るのをやめるように言った心情がどのように変わるかを話し合った。生徒の主な意見は以下の通りである。

作品	フィロストラトスの心情
人質	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の主人に死んでほしくない。</li> <li>・ 自分にとっては、主人の命が第一。</li> </ul>
走れメロス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ メロスが死ねば、大切な師の死が無駄になってしまう。</li> <li>・ 師が大切に思う人を死なすわけにはいかない。</li> </ul>

次に、刑場でのセリヌンティウスの様子をメロスに伝えたときのフィロストラトスの心情について話し合った。主な意見を載せる。

作品	フィロストラトスの心情
人質	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 二人の信頼関係が壊れていないことを伝えることで、辛い気持ちでいるメロスを慰めたい。</li> </ul>
走れメロス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 友を信頼し続けた師の崇高さをメロスに伝えたい。</li> <li>・ 素晴らしい師を死に追いやったメロスに対して、自身の非を知らしめたい。</li> </ul>

そのうえで、生徒には、「なぜフィロストラトスの立場を変える必要があったのか」と問うた。

生徒は、フィロストラトスがセリヌンティウスの弟子に変わったからこそ、メロスは心の奥にあった自身の走る理由を表面化できたのだと考えた。

フィロストラトスはメロスに「お恨み申します」と言っている。これは『人質』にない書き加えである。敬愛する師匠が死ぬ原因を作ったメロスをフィロストラトスは恨んでいる。しかし、師匠の死を無駄にしたくないがために、フィロストラトスはメロスを止めようとする。そして、割り切れない痛切な思いをもって、メロスに師匠の姿を伝えている。だから、その言葉はメロスの胸に響くのである。一方、『人質』のフィロストラトスはメロス側の人間であり、メロスに生きてもらうことこそが大切である。そんな忠僕の言葉だったならば、メロスの胸に同じようには響かない。

セリヌンティウスの様子をフィロストラトスから聞いたメロスは、次のように告げる。

「それだから、走るのだ。信じられているから走るのだ。間に合う、間に合わぬは問題でないのだ。人の命も問題

でないのだ。私は、なんだか、もっと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。(以下略)

これは、作者の書き加えであり、『人質』にはない部分である。フィロストラトスの痛切な思いを感じたメロスが発したこの言葉が、作品全体の主題へとつながっていくことに生徒は気付いた。

**第7時** 学習課題を「刑場の場面のリライトにはどんな効果があるのだろう」とし、話し合いを行った。

まず、刑場の場面で主に取り上げるリライトを確認した。一つは、メロスとセリヌンティウスが、不信に一度陥ってしまったことを互いに告白し、殴り合い、許し合ったことが書き加えられている点、もう一つは、王の居場所が王城から刑場に書き換えられている点である。

これらのリライトを踏まえ、メロス、セリヌンティウス、王の心情について話し合った。

メロスたちが悪心をもち、それを互いに告白するというシーンは「人質」には見られず、この作者の書き加えは、人間の弱さを肯定し、それを克服するという本作品の主題に大きく関わる部分である。ここでの二人の「うれし泣き」は、刑場に間に合い、約束を守れたことに対してだけのものではない。悪心を克服し、信実を守れたという喜びの涙であることに、生徒は気付いていった。

一方、王についても、『人質』では、メロスが間に合ったことを伝え聞き、その結果に感動しているのに対し、『走れメロス』では、それだけとはいえないものがある。刑場にいると書き換えられたことで、メロスとセリヌンティウスの姿を、王は目の当たりにした。不信に陥り、友を裏切ろうとした二人の姿に、王は自分自身を重ねたことだろう。そして、それを克服し、互いの弱さを許し合えたという点にこそ、王は希望を抱いたのだと、生徒は考えた。

次に、第4時で話し合ったメロスと王の類似点について、再度確認した。大まかな内容は以下の通りである。

『走れメロス』では、人を信じて疑わなかったメロスが、悪心に陥り、そこから信実を取り戻した過程が描かれている。そして、彼の中での正義は、友との信頼を守るために全うされるものへと昇華した。

また、『走れメロス』では、冒頭と刑場の場面の書き加えにより、王の変容の過程も読み取れるようになった。冒頭の場面で、王自身が自分も平和を望んでいると発言している。また、実際に二年前のシラクスの町は平和な様子であったことが描かれている。しかし、老翁の証言から、王が人間不信に陥る何らかの事件が起きたことが推測される。そして、悪心に陥った王の心をメロスたちが変えた。さらに、群衆の歓声の描写から、その後の王の再生やシラクスの平和が予感される。

こうした点から、メロスと王の変容の過程は類似しているといえる。

以上のことから、王を刑場に登場させたのは、メロスとセリヌンティウスとのやり取りを王自身に見させるためと、群衆が歓声を起こし、それを王自身に聞かせるためであると、生徒は結論付けた。

本時の最後に、王がメロスの仲間になりたいと考えた理由が二作品でどう違うかについて話し合った。『人質』では、悪として生きていた王が、正義を貫いたメロスに心を動かされ、自分も仲間に入れて欲しいと思った。王は、自分との違いをメロスの中に発見することで、心を入れ替えたのである。一方、『走れメロス』では、メロスの中に自身との共通点を発見することで、王はメロスの姿に希望を抱いた。こうした解釈は作品の主題の把握に深く関連している。

こうした話し合いから、王の場面設定の書き換えが、作品全体の主題や人物像の捉え方に影響していることに生徒は気付くことができた。

#### 4 成果と課題

##### (1) 「深い学び」を実現する単元構成

第7時における王の心情について話し合っている場面を例に挙げる。

T1：刑場の場面のリライトにより、メロスたちに対する王様の見方はどう変わっていますか。

S1：書き加えの「メロスたちが悪心を告白し合い、それを許し合う姿」を王様が直に見ている。

S2：『人質』では、メロスが刻限に間に合ったという

結果を王城で伝え聞いただけ。

T 2 : メロスたちをどう見たかが違うということは、王様がメロスたちの仲間になりたいと考えた理由も変わってくるのかな？

S 3 : 『人質』のメロスは、一貫して正義のままだから、悪である王様がその正義を貫く姿に心を動かされたといえる。

S 4 : 『走れメロス』では、メロスが正義を貫けたことより、途中で悪心に陥ったことが大事。

S 5 : メロスが大切な人の命を奪ってもよいと考えてしまったことを、王様は自分と重ねたのだと思う。

S 6 : 『人質』のメロスだと、王様は自分と違いすぎて、仲間になろうとは思えなかったかもしれない。悪心に陥る弱さに共感したからこそ、王様は仲間になりたいと思った。

S 7 : 二人が許しを得ているという点も大事。悪に堕ちた自分も、もう一度、立ち直れるかもしれないという希望がもてたのだと思う。

S 8 : 許されるという点では、群衆の歓声も王への許しにつながっているのではないかな。

S 9 : こうしたことは、王様が王城にいたままでは描けない。刑場にいるからこそ、二人の姿を目の当たりにしたのだし、群衆の歓声だって聞いた。

『走れメロス』の本文のみを教材として与えていたとすれば、王の心情に関する理解はより表面的なものになっていたかもしれない。本実践では、『人質』と比較しながら作品を解釈していく活動が、生徒の解釈を深めることにつながったと考える。生徒は、群衆の歓声という書き加えが王の未来を暗示していることに気づき、それにより王とメロスの共通点に気付いている。その気づきから、仲間になりたいと言った王の気持ちにまで考えを広げている。また、王やメロスの各作品における人物像の違いを捉えることで、より深い心情理解ができたといえる。そうした解釈を積み重ね、生徒は場面設定の書き換えの必要性に気付いていくのである。こうした単元構成は、生徒の思考の深まりを促すとともに、文学作品の鑑賞への関心を高めるうえでも効果的であった。

## (2) 働かせる「言葉による見方・考え方」の明確化

中心課題に対する生徒の反応例を載せる。

『走れメロス』では、メロスの中での「正義」の意味が変わっていきます。初め、メロスは悪者を正すことが正義であると、自分の中で一方的に考えていました。しかし、最終的には、セリヌンティウスとの間の信頼に答えることが正義だという考え方になりました。それまで、独善的にものを考え、決めつけていたメロスが、人との間に生まれるものを大切にできるようになったのは信頼のおかげです。(中略)

『人質』では、王は王城にいるため、メロスが刻限までに来たことしか知らされていません。一方、『走れメロス』では、王は刑場にいるため、メロスとセリヌンティウスのやり取りを見えています。二人は相手を疑うという悪心をもったことを告白します。王は、これを見て、悪心乗り越え、信頼し合う二人に感動したのです。だから、王様を変えたのも信頼だったといえるでしょう。信頼がメロスと王様を動かし、成長させたのです。

以上のことから、リライトにより、『走れメロス』は心の弱さを信頼によって乗り越える素晴らしさを描いた物語になったといえます。初めから完璧なヒーローでなくても、自分や他人を変えることができるという、全ての人に希望を与える物語になったと、私は考えます。

この生徒は、人物の心情や主題を追究していく過程で、メロスの中での「正義」の捉え方が変化していることに注目した。本実践での学習が、同じ単語であっても文脈の中でニュアンスの違いが生まれることがあるという見方につながっている。また、どのような物語にしたいかという作者の意図が、様々な叙述に影響しており、そうした叙述の一つ一つから作品の主題や登場人物の人物像が形成されていくということにも気付いている。そのため、主題や人物像を捉えるために、重要な叙述に留意して読んでいこうとする姿勢につながっていく。

この生徒は、今後、別の作品を読むときにも、これらのことを意識して読むことができるだろう。このように言葉を意識して読むことが「言葉による見方・考え方」を働かせているといえるのではないだろうか。

(授業者：松田 明大)